広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Kudrunにおける否定詞neの研究 : Der Nibelunge Nôtとの比較において
Author(s)	岡崎, 忠弘
Citation	ニダバ , 3 : 79 - 81
Issue Date	1974-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044716
Right	
Relation	

Kudrunにおける否定詞neの研究

―― Der Nibelunge Nôtとの比較において ――

岡　崎　忠　弘

§1、問題提起

本来の否定詞neはNhd.では融合消滅してしまったが、Mhd.ではまた単独で用いられている。しかし、次第に衰退のきざしは見えはじめている。この視点からDer Nibelunge Nôt（以下Nib.と略す）の否定詞neを考察し、その際neの衰退化を証する根拠として次の3点を挙げた：1.否定詞neは文中ごとに位置する定形にでも付されるのではなく、文頭に立つ単音節語に直続する定形にのみ付される。しかもその文は主文である；　2.neの詩形上の位置はその多くが上拍にあり、niht単独型否定文と照合することによって、この位置のneの存在は恣意的である；　3.上拍以外の位置にある、つまり韻律に関与しているneは詩形調整のための取捨自在の補助手段と化している。

さて、Kudrun（以下kud.と略す）でもneに以上の論拠が求められ、ひいてはneの空洞化・形骸化現象が認められるか――これがこの研究発表のテーマのひとつである。ついでNib.と比較してKud.のneに何らかの特異性が見られるかどうか。もし差異があれば、それはどこに起因しているか――これがもうひとつのテーマである。

§2、Nib.との比較の意義

これは次の6点に求められる：Nib.の推定成立年代は1204年、Kud.は1220～30年で、成立期が近い；　2.共に作者不詳であるが、オーストリアの詩人とされ、作者の地理的位置が著しくは離れていない；　3.共に英雄叙事詩で、文学上のジャンルが同じである；　4.詩形が酷似している；　5.Kud.にはNib.からの引用が多く見られ、Kud.の作者がNib.をnachbildenしている箇所もある；　6.Kud.の唯一の写本Ambraser Handschriftを筆写したHans RiedがNib.をも筆写しているので、同一のコピニストの手に成る写本を比較できる便宜が得られる。

§3、neの使用頻度

Nib.に比してKud.では、　1.neの使用頻度が著しく減少している；　2.このことはne――niht, niemen, nie, nimmer併用型否定文の激減とniht usw.単独型否定文の激増となって現われる。

§４、ne の位置の硬直化

Ｎｉｂ．の場合と同じように、Ｋｕｄ．のｎｅ　の大部分が次の三条件を満たして現われている：1.その否定文は主文であること；　2.文頭に単音節語が位置していること；　3.その単音節語の直後に定形は位置していること。ここにｎｅの位置の固定化を、ひいてはｎｅ の否定詞としての活性の衰えを認めることができる。

§５、ne の詩形上の位置とその恣意性

前節の「ｎｅの現われるための三条件」から、ｎｅ　の大部分は詩形上は上拍と呼ばれる韻律の枠外に位置している。この位置のｎｅは、ｎｅ——ｎｉｈｔ　ｕｓｗ．単独型とを対照比較することによって、その存在が全く恣意的になされていることが判明する。

§６、詩形上の制約によるne の有無

「ｎｅの三条件」を破って現われている少数のｎｅは、　つまり第１Ｔａｋｔ以降に位置しているｎｅは、韻律調整の観点からその取捨がなされていることが、詩形上の分析を通して、直ちに判明する。こうしてne が詩形調整の具となっている点もＮｉｂ．と同様である。

§７、Kudrun のne の減退の起因

Ｎｉｂ．に比してＫｕｄ．ではｎｅが著しく減少していることは先に述べたが（§3.）、その起因はどこに求められるか。「ｎｅの現われるための三条件」はあくまでne の実際の現われがこの条件を満たしているというのであって、この条件さえ満たせば必ずｎｅが現われるというのではない。可能性の要件であって、必然性の要件ではない。とすれば、Ｋｕｄ．のｎｅの減少の著しさの要因は上拍のｎｅの取捨の恣意性に先ず求められよう。そこで、次の方法で両叙事詩のｎｅの補足率を求めてみよう；

$$\text{ｎｅの補足率}(\%) = \frac{A}{A+B} \times 100$$

但し、Ａ＝ｎｅ——ｎｉｈｔ　ｕｓｗ．併用型否定文のうち、「ｎｅの現われるための三条件」を満たしてｎｅが現われ、かつそのｎｅが上拍に位置している用例数、Ｂ＝ｎｉｈｔ　ｕｓｗ．単独型否定文のうち、「ｎｅの現われるための三条件」を満たし、かつne　を補っても韻律の乱調を惹起しないにも拘らず、ｎｅ　の現われていない用例数。この式を用いて両者のｎｅ　の補足率を求めると：

	Kudrun			Der Nibelunge Nôt		
	A	B	補足率	A	B	補足率
(ne)……niht	6	159	3%	171	84	67%
(ne)……niemen	1	24	4%	14	20	41%
(ne)……nie	0	7	0%	15	10	60%
(ne)……nimmer	1	12	8%	30	14	68%
計	8	202	4%	230	128	64%

Kud.の4%に対してNib.は64%の高いneの補足率が認められる。この数値こそKud.のneの減少の著しさの起因を明らかに示している。

§8 Nib.との比較におけるKud.のneの様態

上記§4、5、6を論拠として、Kud.のneにも、Nib.と同じように、neの空洞化・形骸化の現象が認められ、§7を論拠として、Nib.に比してKud.のne の減少の著しさの起因が証明される。

（ 完 ）